

二〇二五年度 自己推薦入試 入学試験問題

文学部 国語国文学科

小論文

注意事項

- 一. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 二. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
- 三. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
- 四. 試験時間は、九時三〇分から十時三〇分までである。
- 五. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子と下書きは持ち帰ること。

「問」次の文章の内容を要約しなさい（三〇〇字以内）。また、傍線部「美しい日本語」について、具体的な例を挙げながら、自分の考えを述べなさい（五〇〇字以内）。

「美しい日本語」って、いったいどういう意味を込めて、この特集のタイトルを決めたのだろう。ふつう「美しい」という形容詞は、「五感に快い」「姿勢が整っている」という意味で用いる。「美しい日本語」があるってことは、「汚い日本語」があるってことか。「五感に不快」で「姿勢が醜い」日本語。たとえば、罵り言葉。最近の「ウザイ」「キモイ」「ムカツク」なんて、まさにそれ。決して所謂「美しい」部類に入る言葉ではなさそう。

ときどき大まじめで、「美しい日本語」からは、そういう汚い語彙は排除しようなんて主張する人がいる。そんなことは土台無理だし、まさか本特集の編集者が、そんなことを考えているはずはないと思うが、念のため、他人のフンドシではあるが、異議を申し立てておこうと思う。

『白い牙』でお馴染みのジャック・ロンドンに、アラスカを舞台にした、たしか『北方物語 (Northern Stories)』という好短編集がある。十二歳のときにロシア語で読んだので、タイトルは忘れたが、その中にこんな話があった（日本語版と英語版を探し回っているのだが、未だに見つからず。もしかして、作者も短編集も全く別なのかもしれないが、記憶の中の本の内容があまりにもピッタリなので、この際、そこところは目をつぶってもらうことにして、要旨を記す）。

主人公は、ふたりの好青年。ふたりとも裕福な家庭に生まれ、教養のある両親のもとで何不自由なく育てられたお坊っちゃま。大学も東部の一流どこを優秀な成績で卒業している。一流の会社に就職し、こうしてアラスカ支社に派遣されているのは、将来を有望視されているからこそである。会社が用意した一軒家にふたりは同居している。

現地の生活に慣れてくると、都会育ちのふたりは、恐ろしい退屈に悩まされるようになった。窓の外は荒涼たる大地が果てしなく続き、娯楽施設はうらぶれた酒場が一軒だけ……。

そんな集落へ、ある日美しい魅力的な女が現れる。残念ながら夫の赴任に付き添ってきている人妻ではあったが、都会的な洗練された身のこなし、賢そうな眼差し、何とか近づきになりたいものだと言葉たちは心をときめかす。きつかけがつかめないまま何日も経ったある日、ふらりとその美女がふたりの家に立ち寄った。彼女も死にそうに退屈していたのである。もちろん、ふたりは有頂天。実際に話してみると、単に容姿がいいというだけでなく、

気さくで教養があつてユーモアのセンスがあつて、不思議なほど会話が弾む。こんなに楽しい時間を過ごしたのは、ここへやつて来てから初めてではないだろうか。ところが突然、楽しい時間はうち切られる。玄関のベルが鳴り、扉を開けると不機嫌面の紳士が立っていて、あつという間に自分の細君を連れ去っていく。彼女がいなくなった家は、今まで以上に暗くうら寂しい。ふたりは、しばらく放心したように黙つたまま座り込んでいたが、ふとひとりが溜息まじりにつぶやいた。

「ああ、くたばれ！ (Oh, go to hell)」

しばらくして、もうひとりの口からもぐぐもつた声が漏れてきた。

「くたばれ！！ (Go to hell)」

それからふたりは口をつぐんだまま、自分たちが受けた輝かしい教育を生まれて初めて呪つた。この不愉快と怒りと不満が団子になったような惨めで悔しくてやるせない思いを解き放つにふさわしい悪たれとして、「くたばれ」という一語しか授けてくれなかった教育を、心の底から恨めしく思つたのだった。

とまあフンドシ部分がずいぶん長くなつたが、要するに言語の使命は、決して美しく整っていることなんかではない。世の中の森羅万象しんらばんしやう、それに複雑怪奇な人の精神を描き出し、罵り、分析し、弾劾し、解釈し、批判し、祝福し、呪うためには、美しい言葉だけではどうてい間に合わないというもの。

評判の悪い「ウザイ」「キモイ」「ムカツク」だつて、今の若者たちのそういう心の状態を実にみごとに的確に表現しているではないか。そして、言葉にとつては、それこそが命なのだと思う。

(米原万里の文章による)